学校をつくろう!通信　珊瑚舎スコーレ　第153号

学校の役割　　その １３０

今号は文章を三つ掲載します。一つ目です。

学校法人雙星舎は私立の夜間中学校「珊瑚舎スコーレ東表(あがりおもて)中学校」の来年度開校を予定しています。(東表中学校の設置認可を巡る問題については二つ目の文章をご参照ください)東表中学校が入学対象者を学齢期が過ぎた方(16歳以上)としていることについてご意見を頂きました。「学齢期を過ぎた方だけではなく、現在不登校の学齢期の生徒に対しても門戸を開いていることが望ましいのではないか」というご意見です。

珊瑚舎スコーレは、入学対象者を不登校とは限定していませんが、義務教育の学齢期の児童生徒に対してキッズスコーレ(5～9 歳対象)、初等部(10～12歳対象)、中等部(13～15歳対象)の３課程の学び場を用意し、彼らと日々「学校をつくろう！」に取り組んでいます。不登校だった児童生徒、不登校ではないが在籍校の教育活動に馴染めなかった児童生徒、在籍校で悉なく過ごしていたが珊瑚舎スコーレの学校に対する考え方に惹かれた児童生徒など入学者は様々です。義務教育の学齢期の生徒が対象ではありませんが、高等部(16～18歳対象)も、意図的にそうしているわけではありませんが、同様の入学者で構成されています。

夜間中学校が不登校の受け皿的な学び場の一つになっていることは知っています。適当な言葉が見つかりませんが、学校教育のアウトソーシング(外部委託)には賛成できません。不登校を生んでしまう既存の学校の在り方自体に正面から向かい合わなければならない問題だと考えています。アウトソーシングではなくインソーシングのための具体的要素の一つのとして夜間中学校を考えなければならないことだと思います。僕は学校制度(主に学校教育法)の抜本的な見直しと改革が必要だと考えています。珊瑚舎スコーレはその典型の具現化の一つを提示することが設立趣意です。

珊瑚舎スコーレは昼間のキッズスコーレ、初等部、中等部と夜間中学校は同じ考え方で運営されています。アウトソーシングを必要としていません。珊瑚舎スコーレ東表中学校は「義務教育未修了者ゼロの沖縄」を目指すことが開設の目的の一つです。学齢期を過ぎた義務教育未修了者を入学対象者にする所以です。

2017年2月「教育機会確保法」が施行されました。この法律は当初、当時の文科大臣の私案として「多様な教育機会確保法」として議員立法化を視野にして討議、検討が行われました。個別学習(既存の学校制度とは別の学びの場での学習)を認める画期的な内容でしたが、詳細はここでは触れませんが、最終的には「第四章 個別学習」は削除され、法律の名称からも「多様な」が消えました。この法律案も対象を不登校としていることには僕は賛成できませんが、個別学習という既存の学校制度の大変革を文科大臣が提起したことには大きな意義があると思っています。近い将来、既存の学校も多様な学び場の一つとして相対化されなければならないと思います。公私に関わりなく、学費の一本化、或いは無償化とともに日本の教育制度の大きな課題と考えています。

珊瑚舎スコーレの教育活動は大海に小石を投げるようなものですが、決してゼロではありません。「学校をつくろう！」という呼び掛けは珊瑚舎スコーレの身内だけに呼び掛けているものではなく、世間に対しても呼び掛けているつもりです。学ぶ権利の保

障は学び場をつくる権利と一体化したものでなくてはならないと思ってます。（ほ）

二つ目です。

ありがとうございます。夜間中学校「珊瑚舎スコーレ東表中学校」の設置を不可とした沖縄県の判断に抗議し、設置認可を求めるための署名は

２２，５４３筆(2月28日締切り分)

に上りました。ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

珊瑚舎スコーレ東表中学校の設置を不可とした沖縄県の判断に対し雙星舎は再審査を要請し、年度内の認可を求めています。3月９日、知事は訪米中のため不在でしたので、副知事に全国から届けられた２２，５４３筆の署名簿とともに以下の沖縄県知事宛て文書を提出しました。

✡　✡　✡

２０２３年3月６日

沖縄県知事
玉城康裕殿

学校法人雙星舎理事長
星野人史

２０２３年３月２日、沖縄県総務部私学課と学校法人雙星舎との協議の場で私学課より示された「夜間中学設置にむけた『教育上支障がない』ことにかかる説明項目等について」に対する学校法人雙星舎の考え及び回答

記

〇総論として

４項目６事項に対する個別の説明、回答以前に沖縄県の私学振興に関わる業務と私立学校の運営業務にあたる学校法人雙星舎との間に生じている齟齬を払拭しなければならないと考えております。

まず、率直な感想です。雙星舎が２０２２年３月３１日に提出した学校設置計画書に対し、２０２２年９月３０日に設置不可の通知がありました。雙星舎はその決定に疑義があるため沖縄県に働きかけ、協議の場が作られました。その場で明らかになったのは「協議」は２０２３年３月３１日までに再度学校設置計画書を提出し、沖縄県が作成した「夜間中学設置にむけた『教育上支障がない』ことにかかる説明項目等について」を１年かけて審査し、支障がなければ２０２４年４月１日の開校が可能との見解でした。雙星舎はこの見解は瑕疵を棚上げし、職務である私学振興を自ら放棄するような姿勢であり、看過できないことであると受け取っています。

珊瑚舎スコーレ東表中学校の設置を不可とする２０２２年９月３０日付けの文書にはその根拠を「中学校設置基準８条を満たしていない」ためと記載されていました。この回答を受け取った際、まず私が感じたことは「知事は夜間中学校の必要性を県民に寄り添った真摯な姿勢で受け止めておらず、“誰一人取り残さない”と訴えた政治姿勢からは全く乖離した判断」でした。失望と同時に私たちの説明力不足も感じました。残された半年、私たちのできることをしようと思いました。設置認可に必要な基準緩和等は知事の裁量の範囲なのです。知事、及び私学審議会長への公開質問状の提出、県民、国民への設置不可反対の署名の呼びかけを始めました。不可判断の再考と再審議を求めるものです。不可通知から約３か月経過していましたが、１２月県議会での知事の答弁は「夜間中学校設置に向けて国に基準緩和を要請したい」というものでした。この３か月間の私たちの働きかけが届いていない答弁と受け取りました。知事答弁は不可の根拠になった中学校設置基準８条以前の問題があります。知事の裁量では判断できないという判断です。これは私学行政の根本にかかわることです。根本とは私学の独自性の尊重とそのための私学振興の２つの柱、大学等を除いた私学行政はこの二つの柱を各都道府県知事の裁量としているにもかかわらず、それを国に要請しようとしていた。この答弁が瑕疵に基づくものと私たちは判断しています。県幹部の「知事の要請があり、国の対応が

変化した」という認識は何を根拠にしているのか不明です。文科省は一貫して知事の裁量に関わる事案との見解です。県当局の的確な知識と的確な判断が機能していれば、「夜間中学設置にむけた『教育上支障がない』ことにかかる説明項目等について」を協議する時間は２０２２年度内に十分にあり、今年度末の設置認可の判断は十分に可能であったと考えています。文科省が設置した「夜間中学校設置促進充実協議会」委員長を務めていた京都教育大学元教授の岡田敏之氏は私立夜間中学校の開設の意義は大きく認可に向けて支援することが沖縄県の私学行政の役割であると述べています。私学行政に対する全うな考えであると思います。

雙星舎は瑕疵の疑義が払拭されることを求めています。今年度内の私学審議会の再審議と再審査を要望し、設置計画を可とするための資料として「夜間中学設置にむけた『教育上支障がない』ことにかかる説明項目等について」に対し説明と回答を以下述べます。

○各項目及び各事項に対する考え及び回答

１．校舎面積について

（１）校舎面積＜全体について＞

校舎は高等専修学校珊瑚舎スコーレ高等部が使う校舎を夜間中学校が利用することを前提にしています。定員を１４名×３学級、計４２名にしているのは高等専修学校の設置基準に合わせ、可能な限り門戸を開いている姿勢が夜間中学校に対しては必要と考えたためです。実際の入学希望者は地理的、時間的な制約を考えれば４２名の約半数、２０名前後と予想していますが、中学校修了者を対象とした主に十代中心の高等専修学校の教育活動が十分可能な設計になっています。そのため夜間中学校三学年全体で最大４２名までの授業を中心とした教育活動は十分可能だと考えています。

（２）校舎面積＜保健室について＞

簡易ベッドを用意し、体調不良者が複数名出た場合は保健室とは別に休めるスペースを確保できるようにします。また、体調がすぐれない場合は欠席を奨励するとともに、登校後気分がすぐれない生徒が出た場合は保健室で横になってもらい緊急連絡先に電話し迎えに来てもらう対応をします。急病、急患が出た場合の対応として、最寄りの救急病院と連携します。

（３）校舎面積＜図書室について＞

授業等で夜間中学校の生徒が利用する図書は主に辞書類ですが、それらはロフトではなく1階の多目的教室の書架に集中的に配置しています。加えて辞書以外の書籍も多目的教室の書架へ移動し、閲覧できるようにする予定です。

（４）校舎面積

＜理科、音楽、美術、技術・家庭について＞

音楽は原則としてピアノのある多目的教室に移動します。オープン教室であり人数に応じて教室を広く取れるため３学年合同授業も可能です。三線、笛等を利用する場合は在籍クラスで授業をします。

音楽以外は生徒の在籍クラスの教室を使います。専用の教室はありませんが以下のような運用で授業を実施します。理科は、「身の回りの現象」「天気とその変化」「地球と宇宙」等の内容の座学が中心です。実験の際は、携帯ガスコンロ等、必要なものを準備します。美術、技術・家庭も同様に在籍クラス教室で可能な内容の授業を実施します。(授業内容については別添資料を参照)。

２．運動場について

馬天児童公園を定期的に利用するのは津波古の老人クラブ(ゲートボール)です。平日夜間に利用時間帯が重なることは基本的にありません。もし同じ時間帯に他の公園利用者と競合しても授業内容から公園全面が必要な活動はなく、共用することができます。隣接する公園を利用することは地域住民との交流という面においても教育上価値があるものと捉えています。

３．体育館について

新里体育館は移動に時間が掛かるため日常的な夜間中学校の体育の授業には使いません。昼間部の生徒との合同スポーツ大会や運動会などに夜間

中学校が参加する際に使うことを想定しています（新里体育館は向こう３年間の建て替えの予定はないと回答をいただいています）。 屋内活動が必要な場合は体育館の代替として、床が板張りの約３教室分と多目的教室をオープンスペースにして使用します。

４．その他（申請で気になった点）

（１）体育の授業について

年齢や体力も異なる様々な生徒がともに活動することを踏まえ、体育の授業では空　手や体操などを実施します。沖縄が育んだ文化の中で空手は最も世界的認知度の高いものです。加えて柔軟性を持つための体操や舞踊を含んだカリキュラムは多様な生徒がともに「心と体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現する」という指導要領の目的を目指せる内容です。体育に限らずこのような教科・科目・単元などに対する指導要領を踏まえた上で夜間中学校という特性を考慮した独自の観点から作られる授業を認めていただきたいと考えています。このことが私学の独自性の保障につながると考えています。

（２）収支計画について

義務教育は無料が原則です。義務教育未修了者の方はかつて貧困が原因で就学の機会を諦めた方が多いです。学費が再び障壁となり夜間中学校の入学を諦めることは避けたいと思い無料にしています。支払う余裕のある方からは可能な範囲での寄付金を頂きたいと思っています。公立の学費は安く、私立の学費は高いという国民意識が支配的で、公私に関わりなく学費は無料もしくは同額があるべき姿と考える人は少ないです。学びに金銭的な格差を持ち込まず、国による公費負担が原則と考えていますが、その状況とはかけ離れているのが現状です。私学が寄付金に頼るのは当然のことと言えると思います。寄付金集めを工夫することが私学経営には必要です。そのための準備はすでにしています。

寄付金は学校法人雙星舎が運営する学校の経営のために使用するものです。高等部と夜間中学校の二つの学校を運営することを前提としていますが、用途を指定した寄付金はその用途のために使用されることを原則としなければならないと考えています。

以上

雙星舎は今回の設置不可の判断は法令等の解釈に瑕疵がありその瑕疵に基づき下されたものと受け取っています。私学課はそれを直接認めようとせず、認可を来年度以降に持ち越すための提案を示していますが、私学の独自性の尊重と私学振興を柱とする私学行政にあってはならないことだと思います。年度内認可のために最後までできることをしようと思います。皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。（ほ）

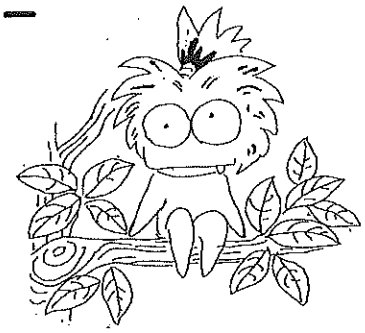
三つ目です。

2001年４月の珊瑚舎スコーレ開校以来、代表職（理事長・校長兼務）をしていた星野は今年度で校長職を退き、公私のパートナーである遠藤知子が校長職に就くことになりました。北海道札幌市に開校準備を進めてしている「モシリナァスコーレ」開設のため、星野が今まで以上に北海道に出掛けることが頻繁になることに対応するためです。星野は今後も理事長・講師として珊瑚舎スコーレの「学校をつくろう！」には参加させて頂きます。

この「学校をつくろう！通信」は1996年８月30日付で第１号が発行されました。「成子天神坂下の沖縄から―『珊瑚舎』設立のはなしをした日のこと」と題した文章が掲載されています。その当時から大勢の方々が雲をつかむような星野の学校作りを支援して下さいました。感謝！です！！

今は故人となってしまったお二人の方に改めてお礼とご冥福を祈る気持ちをお届けさせて頂きます。1997年３月、僕の沖縄移住後、東京での活動などをお二人に支えて頂きました。内田二佐子さん、上田和実さん、ありがとうございます。合掌。（ほ）

がじゅまる しんかぬちゃー



（生徒・学生のコーナーです）

後期学習発表会では毎年「生徒の作る授業」があります。自分たちでテーマを考え授業を作ります。普段自分達が受けている授業を生徒ではなく授業者として参加者に授業をするので、舞台発表とは別にその準備に追われます。すべての学年が入り混じり、ネットで調べればわかる内容とならないよう、参加者への問いかけを考えるためにたくさんの工夫が必要です。2022 年度は４つのテーマに分かれて授業をつくりました。何回目かの生徒も初めての生徒も緊張しながら授業作りをしました。今号と次号で２つずつ授業の感想を紹介いたします。

「生徒がつくる授業　“楽器“」

高等部　吉沢　凜

今回「楽器」の授業を創って、“可能性”について学びました。まず１つ目は、発想の可能性です。私たちのチームは授業を創るのが初めての人が多く、初めは、なかなかイメージがつかめなかったり、一人一人のやりたい事が違い授業自体の方向も見えなかったりしていました。しかしそんなバラバラな意見も聞いていく内に、この人はこんなことを思っていたのか！なんて面白いんだろう！という発見がとてもたくさんあり、その１つ１つを活かした授業がしたくなりました。

また、視点の可能性もありました。発想の可能性の最後で言った「1つ1つを活かした授業」も、内容が授業で考えられないものだったり方向性が全く違ったりする意見があったらどうしよう、と不安でした。でもそれぞれ見ていくと、歴史から昔の人の楽器(音楽)への思いを見つける、自分の知っている楽器を紹介してもっとその楽器を知ったり色んな楽器の色んな楽しさを知ってもらったりする、など全部が楽器を知りたい！ということに繋がっていてとても嬉しかったです。

最後に、楽器の可能性です。演奏で自分を表現する人がたくさんいるように、その演奏に込める想いもたくさんあって、その込める想いによって楽器も変わってくると思います。「あなたにとって音楽とは！」と訊いたとき、自由・信頼・よりどころ・最高！・悩まされているもの・平和につながるなど、皆さんがいろいろな意見を出してくださいました。人々のこんな想いが様々な楽器を作り出しそれが今に伝わっている、と考えると本当にすごいことだと思います。こう考えると、私達は可能性に満ち溢れていると思いませんか？自分を表現する方法は様々ですが、楽器や音楽と共に生きていくこともとても素晴らしいことです。アンケートの「楽器が無くなっていくことについてどう思うか」で、時代と共に楽器も変わっていく・新しい楽器や音楽が出てくるのは面白いという意見があり、なるほどと思いました。また、アンケートの「この授業を受けて新しい発見はあったか」で、ひとつの楽器や音楽でもそれぞれ受け取り方が違う・楽器や音楽と同じように人にも歴史があるという意見がありました。この授業で学んだ何かをこれからの人生のどこかで感じてもらえたら嬉しいです。

「生徒がつくる授業　“スマホ“」

中等部　澤野　天藍

私達のテーマは「あなたにとってのスマホ」です。私達はスマホについての授業をしました。このテーマにしたのは学習発表会「うりづん庭（なー）」の前に、スマホがどれだけ人体に悪影響なのか、そういった話し合いみたいなものをみんなでしたのでもっと詳しく知ってもらおうと思いこのテーマにしました。

＜詳しく調べてどうだったか＞

スマホについて色んなことを調べて行きました。スマートフォンは賢い電話という意味があったりガ

ラケーはガラパゴス携帯の略称だったり、そういった事やデメリットやメリットについても調べました。デメリットはスマホを使いすぎて中毒になったり不眠症や視力の大幅な低下だったり、他にも色々あります。メリットは無駄なものを持たなくても良くなる（メモや時計、カメラ、最近は財布も持ち歩かなくて良くなってきています。他にもetc…）事や連絡が取りやすいなどでした。当日は４グループに分かれて「授業中となりでスマホを触っている人が居たら」「自分にとってのスマホ」について話し合ってもらいました。話し合いの後に各グループの代表者が発表をしました。私のグループでは「授業中にスマホを触っているのは自分かもしれない」「何回か注意して聞かなかったら放っておく」や「生活の一部になっているから暇があったら触る」「仕事以外では使わない」「買い物の感覚が変わった」など、他にもたくさん意見が出ました。それぞれ意見が違うものの、スマホとの関わり方を改めて行こうという意見は満場一致のようでした。

＜授業を作っていて困ったことや工夫した事＞

特にこれといって困ったことはありませんでしたが、発表の文章を書いてくれている人達は悩んでる人が何人かいました。私はあまり何も出来なかったのですが、色々決めてくれていた人達は文章のちょっとしたところまでちゃんと修正をしてくれていて本当に助かりした。それなのに自分はあまり積極的に出来なかったので次回に繋げてもっと関わって行けたらなと思いました。

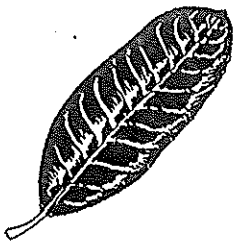
＜当日やって見てどうだったか＞

生徒だけでなく講師や保護者に向けて授業をするのは普段経験しないので、すごく新鮮な気がしましたが、めっちゃ緊張してしまってすごく（やりたくない）（言いたくない）（逃げたい）と思いましたが、グループのみんながサポートしてくれたおかげで無事成功しました。でももっと詳しく情報を伝えたり、話し合いのやり方が少しグダってしまったので、もっとグループと話し合っておけば良かったなと少しだけ公開しました。

それ以外は特に問題もなかったのですが、強いて言えば皆さんに話し合いをしてもらったあとの情報共有があまり出来なかったので他グループでどう言った意見が出たのか知れなかったのは残念に思っています。ですがこういったことを次回に繋げて行けたらなと思います。

最後に授業はどうだったかアンケートを取ったのですが、意見を共有する時間がなかったのでまとめることができませんでした。次からはアンケートの情報もできれば共有する時間を取れればなと思います。

ふくぎのふぁー



（講師・スタッフのコーナーです）

「講師は生徒？」　　当山　彰一

（初・中・高合同アクト&ドラマⅠ講座担当）

珊瑚舎通信をご覧の皆さま初めまして、アクト&ドラマの講師をしております当山彰一と申します。まずは自己紹介をさせてください。

私は20歳で“南野陽子”を羽交い締めして芸能界デビューをしました。（スケバン刑事Ⅱ）TVという華やかな現場から、舞台に活動の場を移し2004年に帰沖するまで47都道府県を飛び回って芝居をしてきました。

帰ってきてからは、舞台はもちろんTV・映画・CM・ラジオなど幅広く活動させてもらっています、ヒューマンアカデミーという専門学校で演技の基礎を教える講師もしています。そんな中、前任の“みうらもとお先生”の代理講師として、2～3回お邪魔したことがきっかけで、2021年から正式に講師となりました。

お話をいただいてから始めるまで不安でいっぱいでした、何故か「小学校４年生から中学３年生が１クラスで演劇を学ぶ」と知ったからです。専門学校で教

えていますけれども、通う生徒は俳優か声優になりたくて演技を学びに来ていて年齢も近い者同士。でも、珊瑚舎の生徒は俳優になりたくて演技を学ぶわけではない、そして難しいお年頃の幅広い生徒さんたち。何をどうはじめて良いものか…。

そんな中、劇作家・演出家の“平田オリザ”さんにお会いする機会があったので相談をしました。すると答えは「大丈夫です、全て子どもたちが教えてくれます」でした。「いやいや、教えなければいけないのはこちらですから、何をどう教えたら良いのか、オリザさんの経験を踏まえて教えてください」と食い下がりました。オリザさんは、子ども向け演劇や豊岡市の小学校・中学校などで演劇を教えている第一人者でもありますから、しかし答えは一緒でした。こうして、具体的なアドバイスを受けることなく授業が始まりました。

最初の授業は、隣の公園でシアターゲームという遊びの中から演じる気持ち、きっかけを学ぶ内容で実施しました。やってみて感じたことは、遊びの中から学ぶ…これでは遊んでいるだけになってしまう。場所を体育館に移し「誰が」「誰と」「何を」「どうした」をカードに書いてもらいそれを演じてみる、これも上手くいきませんでした。試行錯誤しながらの１年が過ぎ、これではアクトしていないし、ドラマも生まれていないのではないか。「私が受け持つ授業は、何を求められているのか？」自問自答の繰り返しで答えが見つからず苦しみました。

私ができること、それは芝居を作ること。ここがブレてはいけないと気づき、劇団を作って１年に最低１回は上演をしようということに行き着きす。

そこで、星野代表に相談しその後、生徒たちに「珊瑚座」を作ることを提案。みんなの理解を得て旗揚げ公演に向け 2022 年がスタートしました。

しかし順調、というわけにはいきませんでした。初めての脚本執筆、初めての演技、初めて芝居創作を４グループに分かれて実施していくので問題多発、生徒間のぶつかり合いも…。それでも、４作品の本番を無事に終えることができました。終演後、生徒は達成感に満ちた顔をしていました。星野代表も「教室は劇場！こんなことがしたかった。」との感想をもらえました。その後のミーティングでは、大変だったことや、楽しかったことをたくさん聞けました、そして全員にレポートを出してもらいました。生徒が感じてくれたことを聞いたり読んだりしている時、ある言葉を思い出しました「大丈夫です、全ては子どもたちが教えてくれます」なるほど、このことか！

「珊瑚座」は無事に旗揚げできました、今後の展開を楽しみにしていてください、そして応援をよろしくお願いいたします。

＜中三　卒業制作＞

2022年度は高等部、夜間中学校と卒業生がいなかったため、「卒業を祝う会」がありませんでした。中等部には卒業はありませんが、修了課題として「あのときかもしれない」という文章を残し、学習発表会で朗読します。今号と次号にわたり紹介いたします。

「あのときかもしれない」（長田弘『あの時かもしれない』より）

＊長田弘の作品『あの時かもしれない』は「きみはいつおとなになったんだろう。」で始まっています。「きみはある日突然おとなになったんじゃなかった。きがついてみたら、きみはもうおとなになっていた。なった、じゃなくて、なっていたんだ。その「いつ」がいつだったのか。」私達はいつ、どんなことで「子どもじゃなくなった」と意識するのだろう。自分の輪郭を知る為に、その境目をみます。（「人は文章を書く生きものです。」（木魂社）説明文より　）

「あの時かもしれない」　中等部　運天　十愛（とあ）

小さい頃によくやっていた「木登り」。まるで未知なる所へ冒険しているようでした。木は、一つの種からどんどん成長してやがては、大きな一本の大木になる。それと同じように人の心は、大木のように、何本、何十本、何百本、何千本、と枝分かれして感情を表している。

人は幼い頃によく木に楽しく笑顔で登っている。でもある時を境に人は、突然木に登るのをやめてしまう。それは何故か？僕が思う事は、「やらなくなっ

た」と言うよりかは「気付いたらしなくなっていた」と言う方が正しいかもしれない。それは「心」がそうするからだ。

人は、「心」と言う他の生き物が持っていないものを持っている。それはまるで「心」と言う土壌に「感情」と言う種をまき、そして何日も何日もその種の世話をする。すると、その種はどんどんどんどんと成長して、やがては感情や気持ち、精神の木、つまりは「魂の大木」になるのだ。その「魂の大木」は、「力の実」と言う実を実らせるが時が経つと木は朽ちるが魂の大木は、その心の土壌に根付き続ける。そのようにして、人の「心」とはまるで「大木」のような心を持っているが、人によっても異なるのだ。

例えばある人はサバンナにある猛暑の地の真ん中に立つ情熱的な心であった。または、極寒の北の地のような冷たい地に植わる白樺のような冷静沈着な心などの様々な「魂の大木」がある。そんな「魂の大木」にも一つ一つ異なる意味があり、その人の心の中に一生根付き続ける。心の大木も大きくなると思考も変わる。木登りしていた幼き頃から段々と大人になるに連れて「木登り」と言う行動が少なくなる。

僕の場合は「小さい頃に木に登っていたら突然足を滑らせて木に引っ掛かった。とても怖かった」そう、この時に、初めて僕の中に、「恐怖」と言う感情が芽生えてこの時から僕は木に登らなくなった。それが僕の「あのときかもしれない」です！

「うりづん庭・高等部やちむん講座生徒作品」

署名のお礼とご報告

昨年末から２月末にかけて多くの方より署名のご協力をいただき有難うございました。最終署名は22,729筆でした。しかし残念ながら設置認可不可は変わりませんでした。

令和６年４月の開設に向け、３月３１日付けて計画書の提出をいたしましたこと、ご報告いたします。

★　★　事務局便り　★　★

★第２２回「春の学校・うりづん庭」（後期学習発表会）が３月11日（土）12日（日）の２日間で行われました。１日目はゲストをお呼びした「まれ人講座」と「生徒がつくる授業」パートⅠ。２日目は「生徒がつくる授業」パートⅡと舞台発表の部でした。「まれ人講座」では沖縄フラワーデモ主催の上野さやかさんをお呼びして、『暴力のない人間関係』を築いていくために私達がどんな事に心を向けていく必要があるか、初等部から高等部の生徒達に向けて講演をしていただきました。決して遠いところの話ではない事、大切な話を生徒達はどのように受け取ったのか、これからも生徒達と一緒に考えていけたらと思います。

★今年度は久しぶりに高等部も夜間中学校も卒業生がいませんでした。「舞台発表」後はそのまま解散。３日間の山がんまり活動の最終日も「畑の卒業式」はありませんでしたが、生徒達の学びを綴った自己評価ノートが配られました。キッズスコーレから高等部の生徒まで１人１人名前を呼ばれ自己評価ノートを受け取ります。そして静かに山がんまりの落ち葉敷きつめる広場に腰を下ろして、講師とのことばのやりとりの世界を楽しむ時間を過ごしました。

★　★　★

●今年度(２月１日～３月31日)寄付・カンパを頂いた方々

石野裕子市野寿子大城喜春小渡律子鹿糠文子北上田登久子城間あずき当山幸江長嶺由紀子真津昭夫矢崎智章山田道子湯本貴和與儀勝子与那覇晴海西山哲平石田みどり竹内新仲村宮子横山真弓萩原真美照本祥敬岩月住江三枝菜美子所扶久代手塚賢至大城博三浦幸子式部恵子森口美千惠丹羽雅代家門収一上田秀一盛口佳子橋川由美子助川寿美子武田富美子辰巳万里子安里桂子安田直美下地孝法岸暁美城間栄順村上呂理丸谷彰喜屋武富男奥本さつみ瀬底純子中地八重子鉢嶺広子新倉美佐子安田圭太郎当山恵子名嘉光夫湯浅松生佐藤日南子松原慶子知念彗子中村ヒサ子西原邦男中村千恵子國吉キク子比嘉亮介恵子須田恵金見倫吾大湾真美タケダシノブ堀淳一新垣由美子新垣良宏西田幸代井口紀雄野原京子横山美保子上泉靖子安渓大慧横川玄泉恵子開発教育協会野村佳雄高橋恵美子大谷一代坂本新一朗菜の花岸本千賀子

発行者　：珊瑚舎スコーレ
事務局　　遠藤知子　樋口佳子
住　所　：〒901－1414　南城市佐敷津波古509―4
Tel　　：098－975－7781　　Fax：098-975―7783
Mail　　：info@sangosya.com
URL　　：https://sangosya.com